

右の鱈口が、現存しているだろうか。  
(出) 現存していない(高室)

伊能忠敬測量日記にある、色利浦大庄屋御手洗与七郎  
と高木姓との関連が思い出された。

与七郎は世襲名である。「寛文四年」と「清原朝臣」、  
これに成松文書を参照すると、色利浦庄産の変遷が解明  
出来るかもしれない。

急ぎの撤収、終つてからいろいろと後悔が残るものだ。  
しかし次の機会に楽しめが残るといふ慰めがある。思い  
つきのまま書きとめて、次は入津湾に移ろう。

(つづく)

紹介

畑野浦の史談会のはたらき

入津湾の入口、は武戸鼻の海岸には、汀道に新しい鳥居が  
立っている。実はこの夏は武戸神社の社殿新築が竣工し、その  
境内につく砂浜海岸と立派な公園がつくられた。その中心、動  
力源となったのが本会を員高沢恭氏の率いる畑野浦史談会であ  
た。このは武戸公園は、入津湾第一の景勝地となった。

畑野浦には本会の会員が現在十六人いる。この会員を  
含む二十数名の組織が、ちりと、公園の造成、野花ハマ  
ユウをはじめ、フェニックス・山もも、夾竹桃などの植  
込みに挺身した。六七十才の老人たちが、ふるさとの環  
境づくりの率先して当り、この夏は県から表彰された。

ふるさとの歴史め文化を切に思い、ふるさとの自然環  
境をととのえることは、単に呼びかけられた位で出来る  
ものではない。人々の、ふるさとに対するせつないま  
への愛情と、共に働くことを喜びとする行動があつてのみ  
可能である。

研究

わがふるさと 元田誌

二十四日の祭典

会員 市野瀬 仁  
(弥生所大坂元田出身)

植松の愛宕神社は、大坂本・尺間両地区の氏神として  
祭る昔の郷社である。

「釈庵愛宕大権現御縁起」によると、創立の歴史も古  
く、慶長元年というから秀吉の朝鮮征伐の終りの頃であ  
る。佐伯地方においては、大友氏が亡び、佐伯惟定は伊  
予に走つてすてに四年後の頃であつた。

愛宕神社は代々氏神としての範囲も今よりもっと広く、  
その神域の森にしても、神殿や石段や鳥居や石燈籠に至  
るまで、格式の高いものであることは一見してわかるが、  
佐伯藩主である毛利高慶公・高標公、あるいは豪商人の  
奉納寄贈によるものであることからもうなずける。

広く世に知られている尺間神社は、この地方の崇敬社  
であつて、愛宕神社創立より二十四年前の、大正元年(一  
九一三)のものといふから、室町幕府滅亡の年で、豊後で  
は大友宗麟の時代に当る。

さて両社の関係は「神武さん」の節で記したように、  
慶長元年の大旱魃の時であつたが、それ以前にも深い関  
係があつた。これについては「釈庵愛宕大権現縁起」に  
次のように述べられている。

「飛尾山は御嶽より時ありて火玉飛下る事往々にして

曆本元年より熊野の神鎮座の地、又天文八年十一月五日、市野瀬五郎八と云える者、佐伯惟治靈神を勧請せる也。故に往昔より村人共、熊野権現の森と稱し奉れり。此森に御籬下れる事深き由縁の事あることと、一同神慮を忝けなす奉り同年六月十一日俄に小社を建立し御籬より勧請成し奉り、(中略)

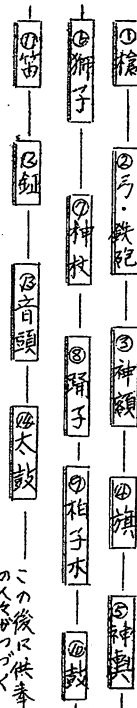
御神号は愛宕將軍之宮と崇め奉りぬ、(中略) 御祭礼は盛慶僧都御籬に始めて奉祀の日に因み、毎歲七月廿一日と定め、降雨を祈りし前書に申合せの五ヶ村の人々、神踊杖、狂言等無滞相勤むる事に申合せ、賑々しく奉仕せり。此故を以て秋魔愛宕両社は二社にして一、一社にして二社、秋魔の神は奥宮、愛宕の神は前宮とこそ申伝へりき。

参考まで、尺間・愛宕神社両社の年中行事を示すと左の通りである。

奥宮尺間社	
新年祭 (春祭)	二月廿四日
例 祭 (夏祭)	七月廿四日
新嘗祭 (秋祭)	十一月廿四日
新年祭 (春祭)	一月廿四日
例 祭 (夏祭)	八月廿四日
新嘗祭 (秋祭)	十一月廿四日

言い伝えによると、七月二十四日の夏祭(二十四日とニジョツカと呼んでゐる)の奉納芸能は、靈験あらたか女尺間山の神によつて降雨をよんだ農氏が、ありがたさに感泣した様子<sup>シヨツカ</sup>を演じたものと云われている。そのためであるうか、二十四日の演舞とメロデーは、いつまでも村人の心に宿つていて、年波が寄るごとに、遠い異境に住む人ほどに、なつかしさが甦つてくる不思議な力をもっている。人々は夏の二十四日を指折り数えて故郷に帰り、祭

が終れば自分の住む土地に再び帰って行く。こうして祭りは長く人々の生活の節目となつてしまつた。二十四日の祭の行列は、次のような順序で繰りひろげられる。



この行列は尺間の天神から愛宕の森まで三ヶ所の間、古式豊かな行列は、笛・鉦・太鼓などの道楽のついで下つていく。ここで二十四日の祭典に奉納される杖踊り、獅子舞について紹介しよう。

### 杖踊り

荒川流風流神の杖踊りは昭和五十年、大分県無形文化財に指定された。

杖踊りは正徳元年七月廿一日、五十川与一右衛門が直弟子市野瀬新兵衛に引継ぎ、ずっと今日に至っている。明治になつて姓を市野瀬から荒川に改めたので、現在の荒川主税(本会会長)は市野瀬初代からの直系である。以後「荒川流杖 斐相伝覚」によると、直系の伝説者の年号と氏名ばかりでなく、加入者の名前が記録されている。そしてそれが、明治・大正・昭和まで続いている。また退く者は名前を並べ、「右の面々明治元年七月退き申候」として記録され、「総計此杖組より退きし者は八十一名」と数えている。苗字は書かれてないがこれらの人達は、元田の誰かの家の祖先であることは間違いない。とくに注目すべきは参加者が元田の人に限らず、切水・宮下・ケゴヤ・奥代の人まで加わっていたことである。

次にならし（杖習、杖踊の練習）について述べよう。

一、古来（今月八月）旧七月十一日より杖仲間、杖頭取の家、集合して、先ず神に込御神酒を供え、直念を終えてから。十一月より祭祀の終るまで、杖仲間、飲食物はもとより自らの手で調へ、女性を禁じ、不潔を避け、齋戒して杖に従事する。奉納時は勿論練習の時でも塩にて手・口等を清め、身も心も清明潔白にして行なう。

杖習の間は、甚蕪の襦をかけ、白鉢巻にし素足で練習する。尚、祭典に杖踊の奉納を終えても、杖組の衣裳・具足等、一切女性の手のさわること禁じ、杖仲間各自、洗濯・つくりい・始末等して保管する。

二、杖組総人員は二十名で、伝統的に長男以外は参加出来ない。

三、十一日から十八日まで杖習を続行し、十八日夜に至つて役割を決める。役割が決まつて神に立御神酒を供え、各自祈願直会をする。

四、十九日、二十日、役割後の練習に熟中する。

五、二十一日、尺間の風流踊組と大坂本杖踊組は尺間天満社に集まり、合同して大杖踊をする。古来これを打組と呼んでいる。

六、二十二日、杖頭取の家に集まつて杖の総切（新しい色紙を切つて総をつかえる）をする。終了後部落総出の立御神酒を奉供し、最後の準備を終る。

七、二十四日、杖組出祭に先立ち、村人一同立御神酒を奉供して、祭祀に無事役目を果たすことを祈り、杖仲間を見送る。そして神幸祭の行列に加わり、神社に参着してその前庭に次々と杖踊りを奉納する。

終了後は無事奉納を祝し、村一同その労をねぎらつて立御神酒を奉供して、直会を催す。

以上の精神と規則を固く守つて、二十名はすべて荒川家に集合してきびしい杖習をするので、相当の疲労をおぼえるため、杖組の家族の主婦は食事を出して、その労をねぎらうのである。

### 獅子舞

獅子舞については全く記録がないので言伝えに従つて述べることにする。

現存の人で獅子舞の長老は御鱗庄（ハニオ）さんである。彼は十一才の時に獅子組に加わつた。当時の獅子組に加わつた。当時の獅子舞で記憶に残っている人は、市野惣五郎（善之祖父）だけであるという。獅子組も杖踊と同じく長男が引継ぐのであるが、人名の記録も残っていない。備後の人としては大石芳作が古い。

大伴獅子舞は元田だけであつたが、何かのことで尺間とトラブルが起きたのをきつかけに、獅子舞も尺間に独立した。このことはおまり古い話ではない。

御鱗庄一氏が子供頃、獅子を入れている箱に「二野瀬」と書いていたのを憶えている。ケゴヤ（菅田屋）の二野瀬は市野瀬の庄屋と縁組をしているし、庄屋の記録に苗字もちやんと出ている古い家であるので、獅子と深いかかりあひがあつて不思議ではない。

思うに現在児玉輝喜氏の家に獅子があるのも、元田の古い豪家として、はぶりをきかせていたりで、何かのキヤンスで移つてきたのである。昭和四十年頃まで使用していた獅子は、児玉自治氏（児玉輝喜氏祖）が京都から購入したもので、すでに百年以上は経つているといわれている。こうした事情から、獅子舞の練習は児玉輝喜氏宅でずつとやつてきたし、練習の時の食事分端に至るまで、この家のお世話になつてきた。

夏休みも終りの頃、夜になると、太鼓と笛の音が元田中流れてくる。子供達は二匹の獅子の恐ろしい面は近づいたり、離れたりして夏の夜の風物を楽しみ、二十四時を待ったのである。

杖踊も獅子舞も、先輩左士の指導できびしく鍛えあげられて、二十四時の祭典を迎える。午前十時頃になると、石原近くから太鼓の音が聞こえてくる。尺間組の行列が、元田の前に到着すると、元田の獅子と杖が合流する。尺間組の所待っている切水・竹峯・小浪・ケゴヤ・宮ノ下組が加わり、一息入れて態勢をととのえる。愛宕の森はすく眼の前である。

カチ、カチ、カチと拍子水にはじまる道楽にのって、獅子が舞いはじめると、行列はやがて出店を並んでいる植松の中心を通過し、大鳥居をくぐりぬける。石段を上る直前、「今から神の御前で演舞を奉納いたします」という意味の杖の構えがすんで石段を上る頃、太鼓の音はますます高く響きあがり、森一杯に共鳴し村中へ流れわたってくる。

高い石段を鼻高面の猿田考が霞払い、獅子かのぼり上ると、神社の境内一帯に待っていた春詣の群衆は、ここではじめて行列と出会う。

神社の広い前庭は強い太陽に当たって、砂鉄でキラキラ輝いている。千人に近い群衆の目は、獅子舞や杖踊なと演舞者達に集中する。

社殿に向って道楽が終わると、杖と先頭に五番の演舞が繰りひろげられる。カラフルで異様な装束、勇壮で強い太鼓のひびき、莊重な笛と鉦の音、ポンポンと軽快な鼓の音、杖踊の気合の入った声と動き、意表をつくような獅子舞の恐ろしさとおもしろさ、丸い輪を描く子供達の

窮蹙と騒い（さわ）いの声（風流）に織りなす交響が一時間あまりつづく。この瞬間こそ、一年で一番楽しい祭のクライマックスである。

再び終りの道楽が始まると、杖踊り行列を組んで石段下のはじめめる。暑い陽ざしに体中が汗でビツシヨリ。行列が石段の下の大鳥居をくぐる頃、シヤンシヤン、シヤンシヤンと鳴く蟬の声にはじめて気がつく。これで祭りの演技はいっさい終わった。

実はこの奉納の風流・杖踊は、何回かの変化を経て今日に至っているのだ。

第一に大坂本の組が、一応尺間の天神に集まり、全部揃った後行列を組んで、尺間の天神から愛宕神社まで下るようになったのは、昭和二十五年頃からである。

第二に尺間のお神輿は重いので、以前は「尺間神社」と書いた額で代行していた。しかし協議の結果、二十三日の晩に、整い愛宕神社の神輿を大坂本の人達が尺間の天満社に移し、夜をこめてお籠りをするようになったのもこの時からである。

第三に二十四日の奉納芸能が終わると、大鳥居のところで地狂言があったが、それが絶えたのは日華事変が始まった頃であった。

第四に、最近の話では子供達の踊りは、規定では十五人だが、五年前募集したところ、三十人あまり集まり人選に困った。反面獅子組など大人が足りなくなつた。とくに祭典が日曜日でなければ、勤めにでて人がいないので、日役として備わねばならないようになった。

以上はまだ最近の変わり方で、知っている人が多いが、古記録に出ている五か村、即ち上野村・下野村・古市村・上岡村・大坂本村（尺間村を含む）の、最初の頃の神踊

・杖踊・狂言はどんなものであったらうか。いつ頃どう変って今日になつたものであるうか。また、十四組の演技の内容は同時に生まれたものであらうか。また元田の杖踊の起源は分るとして、獅子舞の由来は全く分らない。ましては舞踊や、笛・鉦・太鼓などを加えた全体組立てやタロデイの構成は、いつ頃どうして出来上つたものか、一切謎のままである。

しかし、この謎は解けなくとも、氏子たちにとって、この祭典だけは長く村人の体に浸められて、けつして忘れられるものではない。村の連帯の意識を支えて、ずっとずっと続いていく。この事実こそ、文化遺産としての価値を十分に示しているものといえよう。

まとめ

村の祭りごととは、およそ農作物の植付から、収穫期に至るまでの段階におおせて組みこまれていく。その目的も自然や祖霊神を崇拝することをはじめ、農作物の豊作や人々の招福を願い、災害や難病と避けるための祈願行事とする。現世的な利益を得るためのものが多かった。

祭りの中には、村の古い家の祖霊神がいつの時代か村全体のものとなつたり、村の有力者のリードによつて新たに祭られたり、あるいは一信仰者や祈禱師によつて、燈明が絶えなかつたりしているものもある。このように種々雑多な要員が長い歴史の上に、重複して祭られて今日に至っている。

しかし村人は祭りの由来を知ることよりも、年中きまつたお祭りをこなすことによつて、無意識の中にも部落の共同体意識を深めてきたのである。別に郷土愛などとりたてて云わずとも、己が部落に安心して暮らせる気持は、お互いに根強いものがある。その証拠に、一旦村にこと

が起きた時、喜びも悲しみも共に分かちあつて、連帯感と味あつた経験が幾度かあつた。

仏事

祭りが現世的、集団的であるのに対して、未來的、個人的な精神構造の中心をなすものは仏教がある。

仏教の中でも私達の部落においては、浄土真宗の教えが根強く、というより、しつとりと生きていくといつた方がよからう。一見現代のお寺は、お葬式とご法事ばかりしか寄與していないように見えるが、老人や信仰者には仏の教えが唯一の命でもある。

西音寺においては、月の六日に寺の御開山、十六日に親鸞上人、二十八日に蓮如上人のご供養があり、限られた人ではあるがお参りしている。この外、無縁仏の供養に「春御縁」があり、盆の行事を「親鸞上人の命日」と取り越してする「お取越し」が持たれる。今ではこれら行事の内容が、ごく簡単に扱われるようになったことは、村の祭り行事と共に時代の流れと言えよう。

この外、「お座」といって家々の定められた命日の夜、老人たちはその家に仏参りしご供養にあずかる。仏教の教えは「南無阿弥陀仏」を唱名し、感謝の日送り、迷信はとらわれない生き方を、村人に教えているようである。

村人は氏神を祭つて横に手をかり、仏壇に向つて手を合せて縦に手をかり、人間の有限から無限のものに願いをこめて生き続けている。どこか村人もそうであるように。

(第二)

西音寺(浄土真宗) 本尊阿彌陀如来 寛永十年創建

(この項おわり)

(付二) 大坂赤・元田鎮座神社一覽

本多 天満社 祭神 天穗比命 菅公 元禄二年創立  
 荒木 天満社 天葦比命 菅公 元禄十二年創立  
 天満社 天葦比命 菅公 元禄三年創立  
 北山 天満神社 菅原道真公 氏子三十二戸  
 谷山 天満神社 菅原道真公 氏子十六戸  
 井津利波山 山神社 祭神 大山秋命 (石祠)  
 源 戸山 山神社 大山秋命 (石祠)

大坂赤・元田地区の民俗信仰

	宇藤水	川中	年神	曙平土	岡	尺間	長畑	備後	津苗	石原	元田	宮下	ケゴヤ	小浪	桐原	小崎	切水	竹峯	計
生目	○					○	○							○	○	○			7
火代	○	○	○	○	○			○	○	○					○				7
山神	○									○									2
庚申		○					○								○	○			4
徳勝	○																		1
金比羅	○														○		○		3
稻荷		○				○				○				○					3
天権		○				○	○			○	○					○			8
富屋	○						○												1
神武										○									1
地蔵		○																	1
大船	○	○				○	○												4
観音	○					○													2
石神		○																	1
計	5	9	1	1	1	6	5	1	1	3	4	0	1	1	5	3	1	2	
備考					合併			合併	合併										

(付四) 元田の祭り行事日程

一月十六日 山ノ神祭  
 午後一時から二戸一人、荒木興山の神に参拝、お神酒をささげる。  
 三月 春御縁 無縁仏の供養、適當な日を協議決める  
 四月 火伏祭 定日はない、昔は別々にしていたが、今では同日祭式となった。  
 七月十五日 天神祭 昔は夏祭日六月十九日であった。(氏神祭)  
 十月 火伏祭 (火伏祭)  
 十一月廿三日 天神祭 冬祭 昔は旧十一月十九日であったが、今は勤労感謝の日となった。

史料

下直見村年代記 (二)

— 佐藤大庄屋の手記による —

資料提供 会員 曾 宮 衛 吉  
 解説・年表作成 羽 柴 弘

年号	西暦	高誠	主	記 録 事 項 (原文のまま)
文化元子	一八〇四	高誠	主	三月十日隱居被仰付、金子五疋足被仰付の
				八月十九日大洪水、井手川險被損、田畑不作
				献銀銀老入八百目指上、御心置、金五疋足被仰付の
文化二丑	一八〇五			六月十五日より参宮、七月廿七日罷下りぬ
				殿様御那廻り十月九日より、久部堅田下瀬
				二の御村同廿二日より廿三日、御小休ぬ